

氏名	蔡 梅花		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博文化甲第23号		
学位授与年月日	平成28年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当		
学位論文題目	「連体修飾句の形容詞的用法について」		
論文審査委員	委員長	教授	小出 慶一
	委員	教授	仁科 弘之
	委員	教授	川野 靖子
	委員	教授	武井 和人
	委員	教授	山中 信彦

## 論文の内容の要旨

蔡梅花氏（以下、著者）のこの論文（以下、本論文）は、日本語の連体修飾節のテンス・アスペクト性が希薄になる用法、いわゆる形容詞的用法について、多角的に検討を加え、これまで部分的にしか議論されてこなかったこの用法の性質について、統一的な捉え方を示すとともに、新たな研究方向を探る試みである。本論文は7つの章から構成されるが、各章の要旨は次の通り。

1章では、本論文の検討対象である連体修飾節の述部に3つのタイプを区別する必要性が述べられている。そうすることによって従来議論が混乱しがちだった、「割れた皿」の「割れた」のような語が扱いやすくなることが示されている。また、形容詞的用法は「連体修飾節が性質・状態を表わす用法」と再定義されている。

2章では、本論文のテーマに関係する先行研究が幅広く概観され、次のような問題点が指摘されている。この5つが以下の章で順次検討される。

- 1 形容詞的用法を持つ動詞の特性についての議論が行われていない。
- 2 結果残存アスペクトを持つ動詞が形容詞的用法化しやすい理由が検討されていない。
- 3 形容詞的用法における「タ」「テイル」の選択基準が検討されていない。
- 4 先行研究における「形容詞的用法」の規定が不明確である。
- 5 事態把握の仕方と「タ」「テイル」選択とのかかわり

3章は、形容詞的用法になる動詞の性質はどんなものかを、コーパスなどから得た用例をもとに検討している。その結果、「タ」になるものはすべて自動詞、「タ・テイル」両形をとるものについても自動詞が多く、また、自動詞の中でも非意図的な事象を示す非対格動詞が多数を占めていること、さらに、他動詞についても、再帰性を持つものが

ほとんどであることが見出された。つまり、他動性の低いものほど、形容詞的用法になりやすいことが指摘されている。

4章は、先行研究で形容詞的用法とされてきたものの中には、アスペクト性が持つものがある、というのが本論文の重要な指摘の一つだが、そのような用法を「疑似状態の形容詞的用法」と呼び、どのような動詞がこの用法を持つかを検討している。これは、形容詞的用法の認定にもかかわることでありながら、これまで議論されてこなかった問題である。検討の結果、このような性質を持つのは、変化の結果が際立つ動詞であること、そして、その変化の成立時点に注目するとタ形に、結果に注目すればテイル形になるという観察が得られた。

5章は、タ・テイルの両形が可能なとき、そのどちらがなぜ選ばれるかの選択条件を検討している。先行説では、「形容詞的用法はタ形になるのが普通」とされているが、テイル形も少なからず出現している。本論文では、同市の表す事態の限界性（運動が必然的に尽きる内的時間的限界）という概念を用いて、選択条件を検討している。結果としては、限界点が認識されやすい（ある事柄が起きたという、事柄の成立に焦点を当てる）場合にはタ形、そうでない場合（事柄の成立結果が残っている状態に焦点を当てた場合）にはテイル形になると述べられている。

6章は、ここまでの章とは観点を換え、「もの」「こと」という形式名詞の修飾形式の違いを通して、タとテイルの選択に関わる要因を検討した。新聞記事コーパス「均衡コーパス中納言」を使って調査を行い、連体説の表れるこの数と武井、テイル形との関係を検討した結果、項数が0の時には「タ」、項数の増加に従い「テイル」が増加するという相関を見出した。そして、この背景には、事態をモノと捉えるか、コトと捉えるかという人間の事態認識の仕方、心的走査法の違いにあるのではないかという予想が述べられている。

終章は、本論文のまとめと今後の課題が述べられている。

## 【目次】

### 第1章 連体修飾句のアスペクト性

1. 研究動機
2. 研究目的
3. 形容詞的用法の定義
4. 本論文の構成

### 第2章 テンス・アスペクトに関する先行研究

1. 終止形のテンス・アスペクトの研究
2. 連体修飾節のテンス・アスペクトの研究
3. 形容詞的用法に関する先行研究とその問題点

### 第3章 連体修飾句の形容詞的用法と他動性

1. はじめに
2. 先行研究
3. 調査
4. 形容詞的用法と他動性の関係
5. まとめ

#### 第4章 連体修飾句の形容詞的用法と疑似アスペクト性

1. 問題の所在
2. 先行研究
3. 疑似状態の形容詞的用法
4. 形容詞的用法による動詞の分類
5. 「疑似状態」の形容詞的用法に現れる動詞の特徴
6. まとめ

#### 第5章 連体修飾句の形容詞的用法と「タ」形・「テイル」形の選択条件

1. 問題の所在
2. 先行研究
3. 中間動詞の他動性以外の特徴
4. 終了限界時と形容詞的用法の「タ」形
5. 限界達成後と形容詞的用法の「テイル」形
6. まとめ

#### 第6章 連体修飾句の形容詞的用法と心的走査

1. はじめに
2. 先行研究
3. 予備調査
4. 仮説1の調査
5. 「テイル」形・「タ」形と心的走査の関係
6. まとめ

#### 終章 1. 結論 2. 今後の課題

#### 参考文献

本論文に関する既発表論文

## 論文審査の結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を2016年2月24日(水)に公開で開催し、著者による発表を踏まえ、質疑を行い、論文内容を審査した。

本論文における特徴的な研究上の方法、結論付けられた新たな知見・見解、また研究現況に与えると考えられるインパクトなどを挙げる。

1) これまでともすればあいまいな規定のまま議論されてきた形容詞的用法というものに、疑似状態の形容詞的用法という新たな区分を設け、より厳密な議論が行われる基盤を作った点。また、その際、形容詞的用法か否かのテストに、共起副詞の違いという客観性の高い方法の利用を提案していることも評価される点である。

2) 形容詞的用法と他動性の低さとの関係を指摘した点。これまで、なぜ形容詞的用法化するのか、全体的統一的な検討はされておらず、また、統一的にとらえるアイデアも提案されてこなかった。たとえば、形容詞的用法と「結果の残存」性との関係を指摘した先行研究はあるが、それがなぜかは説明されてこなかった。本論文は、他動性という観点を提案し、また、それが有効であることを多くの動詞の調査を通して実証性に示した。今後の連体節研究の新たな出発点を示したと言ってよいと考えられる。

3) 被修飾名詞の違いと、タ形テイル形の関係が、認知言語学的な視点から理論的に示された点。本論文では、コト、モノという2つの名詞しか取り上げられていないが、連体修飾節の性質を考える際の新たな視点を提案したものであり、この分野の研究の新たな方向と方法を示したものと言える。被修飾名詞の性質と修飾節の形態との関係については手つかずの領域であり、今後の研究の進展が期待される。

本論文の研究姿勢、およびもたらされた結論は、上述の如く高く評価されるべきものであるが、しかし、なお検討されるべき問題、論証の徹底、等が在することも事実である。発表会で委員から出た意見等を集約すると、以下のようなになる。

1) 用語が十分に整理されていないと思える点がいくつか見られた。たとえば、3章、4章で使われている「結果の残存性」「完了性」という概念と、5章の「限界性」という概念は重なるところもあるように思われるが、異同に関しての説明がなかった。ほかにも、典型的・非典型的形容詞動詞と中間動詞との違いが曖昧であることなど、章の間の整理が不十分な点も見受けられた。

2) 6章では、被修飾名詞とタ形、テイル形選択の違いが検討されているが、その際、修飾節と被修飾名詞の関係の違いは無視される形になっている。うちの関係にあるもののほうが、モノ的に扱われやすいという予想も成り立つ。内・外関係を区別した検討

を望みたい。

3) 本論文では扱われなかったが、連体修飾節の性質を考える際に避けて通れない課題として次のようなものが指摘された。

- ・なぜタ形の形容詞的用法は連体節でしか成立しないのか。
- ・連体修飾の形には、タ形テイル形のほかにル形も存在する。ル形も含めて検討すべき。
- ・連体修飾の形は、句として扱うのがいいのか、節として主節と独立性の高いものとして扱うべきか。

本論文には、これらの問題点はあることも事実であるが、総体として見れば、今後、当該研究領域において、大きなインパクトを与える業績として認知されるであろうことが予想される。

以上のことから、本委員会は、本論文が学位論文の要件を満たしており、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。